

日本ラカン協会 夏のワークショップ

オンライン精神分析の可能性

日時：2025年7月6日（日）14:00～18:00

場所：オンライン（Zoom）

（要事前登録（お申し込みフォームへのアクセス方法については、別途お知らせ致します。定員40名（個人情報保護に留意しつつも事例に触れるため。）先着順。）

参加費：無料

提題者：Tajan Nicolas（京都大学）

Remy Potier（Lyon 大学）

小林 芳樹（小林心療内科・精神分析室）

司会：牧瀬 英幹（中部大学）

- * 仏語発表・日本語の文献配布、通訳あり。
- * 今回のワークショップでは実際の症例も提示され、参加者にはそこで知り得た患者に関する個人情報に対する守秘義務が発生します。参加申込をした段階で、この守秘義務に同意したものと見なします。
- * お申し込みいただいた方には、開催当日1日前までに、Zoom へのアクセス方法をお知らせ致します。

Covid-19 の流行とともに、日本でも Zoom 等を用いたオンライン精神分析が身近なものとなった。Covid-19 の終息後、再び以前の対面での精神分析へと戻ってはいるものの、デジタル技術の進歩も相俟って、オンライン精神分析の需要は益々高まっているように見える。このため、オンライン精神分析の可能性を問うことは喫緊の課題であると言える。

世界を見渡してみると、Covid-19 の流行以前にも既にオンラインでのセッションに関する研究は為されており、その成果も大分積み重なってきている。その一つとして、セルジュ・ティスロン、フレデリック・トルドによる『ヴァーチャルに治癒される人間—サイバー心理学が問う新たな主体』（佐藤愛・阿部又一郎・縣由依子訳、誠信書房、2025年）をあげることができる。本書において、セルジュ・ティスロンは、デジタルによって揺さぶられるセラピーの枠組みについて、次のような5点を指摘している。

(1) 到着と出発—ワンクリックでの出会いと別れ

対面セラピーにおいて、相談室への患者の到着は、徐々に進んでいくものである。患者は、セラピストのいる空間や界限、通りの風景、待合室にだんだんと慣れていく。たとえオンライン上にもヴァーチャルな待合室があるとしても、接触はいつもむき出しであり、ときに侵襲的に感じられることもある。面接の終わりでも、同じことが言える。セラピストなら誰しも、対面における玄関先での交流が、どれほど重要であるかを知っているものである。

(2) 相談室から対称的空間へ

対面では、セラピストと患者は、相談室という同じ空間にいる。それに対してオンラインでは、セラピストと患者は、それぞれが自分のパーソナルスペースの中にいる。したがって、双方の状況は対称的なものとなる。それぞれが特定の雰囲気を作り出すために、別々に舞台上の演出を構成する。

(3) セッション空間の専有化

私たちは、空間を変えることができればできるほど、その空間を専有化でき、その空間に内包されていると感ずることができると感ずることができる。患者の中には、自分に提供された椅子を、自分で動かして移動させる必要性を感ずる人がいるのは、そのような理由からである。遠隔の場合では、こうした可能性はまず存在しないが、なかには、セラピストがウェブカメラから少し離れるよう、あるいは近づくよう求めたり、少し横顔を向けるように要望する患者もいる。患者側のこうした要望は、これから分析に入っていく際に、受け入れられる必要がある。

(4) 共鳴しない身体

近接したコミュニケーションでは、身体の姿勢や動きが、大事な役割を果たしている。身体の姿勢や動きは、同意や不同意を示す無言の証となるし、2人の対話相手の一方が、いつ話したがっているかを示している。それらは、共感の基礎となる感情を示す。それらは、無意識的な運動共鳴を生み出す。人間の行動はすべて、周囲の人の行動によって変化する。これは意図的な行動と、本人がまったく知らないうちに展開される行動との、両方に当てはまる。こうした現象は、2人の間にもたらされる相互的信頼において、重要な役割を話している。

(5) 交わらない視線

対話相手の目を見れることは、共感の構築に寄与する。共感とは、自分を見失うことなく、相手の立場に立って感情的に想像する能力である。しかし、オンライン上のコミュニケーションでは、対話相手たちはウェブカメラではなくスクリーンを見ている。その結果、各々がよそ見をしているような印象を与える。ウェブカメラを介したコミュニケーションは、話を聴いてもらっていない感ずや、あまり理解されていないかもしれないという懸念を助長することがある。その結果、つながりの存在に不確実さを感じ、自分の感情や言葉が理解されているかどうかを確認するために、暴言を吐きたくなる人も出てくるのである。

オンライン精神分析を実施していく際には、このようなデジタルによって揺さぶられる

セラピーの枠組みの問題を検討していくことが求められるが、北山もまた、日本におけるオンライン精神分析の現状を踏まえながら、同様の課題について言及している。加えて、オンラインでのやり取りに伴う「身体性の喪失」や「生身性の喪失」が、「グーテンベルクが活版印刷技術を持ち込んだときに、聖書が皆に行き渡り、神父様の肉声による聖書の語りの迫力がなくなった」こと、すなわち、複製文化によって「聖なる一回性」が失われたことと相同的な関係にあると示唆している点は興味深い。さらに、オンライン精神分析の発展により、「サイコセラピストもローカルな仕事が無くなって、中央にいるネームバリューがある先生たちだけが発信していくなんてことは、もう起こりつつあるかもしれない。スーパービジョンだって、いったん Zoom でも構わないということになったら、ロンドンにいる分析家のスーパービジョンが受けられるわけで、それはローカルのスーパーバイザーの仕事を奪っていくことになる」と述べつつ、「GAFGA の一人勝ち」を危惧してもいるように、分析の問題のみならず、より大きな文脈からオンライン精神分析を検討することの必要性を訴えてもいるのである。(北山修：オンラインと「聖なる一回性」、『サイコアナリシス・オンライン』(ジル・サベージ・シャーフ編、妙木浩之監訳、岩崎学術出版社、2021年))

では、このような状況を鑑みた上で、ラカン派精神分析の立場からは、オンライン精神分析の可能性についてどのように検討していくことができるのだろうか。この問いに答えるべく、本ワークショップでは3名の先生方にご登壇いただき、活発な議論を展開していきたい。

(牧瀬 英幹)

変種への回帰

Tajan Nicolas (京都大学)

オンライン精神分析は標準的な治療の一つの形と言えるだろうか？この問いに答えるため、私は、ジャック・ラカンの「Variantes de la cure-type 典型治療のヴァリエーション」と題されたテキストに立ち返りたいと思う。このテキストは1953年にアンリ・エーがラカンに依頼し、当初は1955年に『医学外科百科事典』に掲載されたが、1960年にそこから削除された。現在は1966年刊行の『エクリ』の323-362ページで読むことができる。

アンリ・エーがラカンにこのテキストを依頼した時期は、フランス語圏の精神分析界にとって転機となった。1952年には精神分析研究所の創設を巡る危機である「師たちの不和」が起こり、それに続く「弟子たちの反乱」と分裂を経て、1953年にフランス精神分析学会(SFP)が設立された。その後10年間を経て、ラカンの破門と1964年のパリ・フロイト派学校(EFP)の創設で幕を閉じる。この時期、問題となったのは単にラカンという人物ではなく、むしろ彼が試みた短時間セッション—その長さも頻度も変動する、型破りな方法だった。これに対してフロイトは、1時間に1人、55分間の決まったセッションを行い、同じ

日に2度以上のセッションを設けることはなかった。こうした基準を、ラカンは打ち破ったのだった。

本発表では「典型治療のヴァリエーション」のテキストを紹介した後、Covid-19のパンデミックによって急増したオンライン相談がもたらしたさまざまな問題を検討する。

外部から捉えられた枠組み：オンライン精神分析の人類学的変容

Remy Potier (Lyon 大学)

Covid-19のパンデミックは、精神分析に強制的な実験をもたらした。それが、電話や画面ごしに行う遠隔治療である。この技術的変容は、普及するなかで、分析行為の根本的な構造を変えるのではなく、むしろそれを露わにし、分析家たちの技法と理論的基盤を揺さぶることになった。本発表は、遠隔という形式が分析の場に何をもたらしたのかを問うものであり、遠隔精神分析を賛美するのでも否定するのでもなく、その真理効果を弁証法的に捉えようとする試みである。

遠隔装置は「ファルマコン」として機能する。絶え間ない接続の網の中で欲望を飼いならす時には毒となり、無意識を明らかにする投射的な表面となる時には薬となる。技術的な外部によって捉えられた分析の枠組みは、その真の性質、すなわち空間的な装置ではなく、包容の精神機能であることを露呈する。ただし、この枠組みの変容は、使用される技術のかたちによって大きく異なってくる。

電話は、顔を合わせないこと、声の抑揚や沈黙、呼吸に意識を集中させること、そして聴覚の退行によって、分析的な夢想能力を別のかたちで引き出す、純粋な声の親密さを作り出す。それは、寝椅子（ディヴァン）での配置を思い起こさせるかもしれない。電話は、寝椅子の配置を想起させるような純粋な声の親密さを確立する。対面がなく、声の抑揚、沈黙、呼吸に集中し、聴覚的な退行が、分析的夢想の能力を異なる形で刺激する。身体から切り離された声は、これまでにない喚起力を獲得する。一方、スクリーンは媒介された対面を生み出し、視線と視覚的把握の問題を別の形で提起する。それは、親密さの新たな枠組み、演出の可能性、視覚的疲労、音とイメージのズレといった現象を引き起こす。それぞれの装置が、固有の転移効果を生み出すのだ。この違いは、極めて重要な臨床的問いを提起している。身体的に同じ場になくても転移は成立するのか、そしてその転移はどのような技術を介するかによって異なるのか、という問いである。成人と青年の事例分析によれば、それぞれに異なる象徴化のプロセスが見られる。電話の純粋な声が特定の退行と形式的なシニフィアンの出現を促進する一方で、スクリーンは、仮想的なものが逆説的に心的現実へのアクセスに役立つ、別の形態の投射を展開する。

この倫理的課題は技術的なプロトコルを超えている。それは、距離と他者性を廃止しよう

とする世界において、欲望の倫理を生かし続けることである。オンライン精神分析は、古典的分析の劣化でも改善でもなく、現代の人類学的変容を解明する特権的な分析装置である。分析家は、スクリーンや電話を、転移の現実から逃れるための遮蔽物にしてしまわないよう踏みとどまり、それぞれの技術が持つ異なる特徴を精神病理の構造に応じて見極めることが求められる。このような姿勢によって、無意味な賛成・反対論争を避けつつ、高い知的水準を維持し、伝統的な精神分析の精神を尊重しながら、同時に時代の変化に応じた創造的な変革力を発揮できるのである。

精神分析経験における身体

小林芳樹 (小林心療内科・精神分析室)

生身が現前することで成立する現実界の治療にとっての本質的な機能に関して、1999年にジャック＝アラン・ミレールが指摘した点がある。「互いの姿を見、言葉が交わされるといふことだけでは、精神分析セッションは成立しない。セッションにおいて寝椅子を用いたとたん、それらは同期しなくなる。性関係の不在が浮き彫りになるには、分析家と分析主体双方の生身の現前が欠かせない。現実界を軽視すれば、逆説は霞む。あらゆるバーチャルな形態は、いかに洗練されようとも、この点において頓挫する。」

新型コロナウイルスの大流行以前、多くの AMP (Association mondiale de psychanalyse 世界精神分析協会。ジャック＝アラン・ミレールによって1992年にブエノスアイレスにおいて設立され、現在以下の7つの団体から成っている：L'École de la cause freudienne フロイト大義学派, ECF, パリ, 1981年 / Escuela de la orientación lacaniana, EOL, アルゼンチン, 1992年 / Escuela lacaniana de psicoanálisis, ELP, バルセロナ / Nueva escuela lacaniana, NEL, アルゼンチン、ブラジル以外のラテンアメリカ諸国 / Escola brasileira de psicanálise, EBP, ブラジル, 1995年 / Scuola lacaniana de psicoanalisi, SLP, ローマ, 2002年 / New lacanian school, NLS, その他のヨーロッパ諸国, 2003年)の分析家たちはバーチャルな手法を用いた精神分析の可能性など、一顧だにしていなかった。

大規模にバーチャルな精神分析が実施されるもとなったのは、非常に感染力が強く致死的なウイルス性伝染病の出現がもたらした2019年11月に端を発する地球規模の危機である。緊急隔離や社会的サービスの制限という措置が課せられたことで、人々は蟄居や国境封鎖、渡航禁止を被った。精神分析的経験においては、これらの措置は分析主体が分析家に会いに行くという移動に対して、影響を及ぼした。仮想空間は、精神分析的行為の実践のための障壁に対処し、乗り越えるための方策として出現した。

精神分析は、語の物質性が特異な仕方で含意されている実践である。まず分析家は自身の発話の経験から生成する。そして分析家は自身の固有の享楽の様式の説明に努める。それは

さらに、言に賭ける分析主体の無意識の言説の読み手として、その主体を突き動かす症状の享楽を検証するためである。精神分析の言説が毀損されないために精神分析家は、仮想空間の影響下の分析実践について語り、絶えず批判的に検討しなければならない。

精神分析実践は、このようにしっかりと厳密に定義された経験であるが、言語のように構造化され、各々の分析主体により言説において明瞭に発せられる無意識の発見に負っている。無意識の言説は本質的な欠如や、フロイト以降性に位置づけられた喪失を想定している。一方、精神分析経験に仮想空間を持ち込むことで、より正確で構造化された臨床が必要となる。話存在についての再検証が要求される。

網羅的に臨床経験を寄せ集めることでプラットフォームを作るという間接的な手法で行われた AMP 実行委員会による研究、および提題者自身の分析主体、分析家として経験を踏まえて、仮想空間を用いた精神分析の可能性を検証する。

日本ラカン協会事務局

連絡先：〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200

中部大学生命健康科学部 55 号館 6 階 牧瀬英幹研究室

E-mail : sljsecretariat@netscape.net